

このロシア帝国の傍若無人の侵略ぶりに、危機感を抱いたのは日本だけではありません。シナに多くの權益を持つイギリスも、同様に危機感を抱いたのです。小村外相は林董駐英公使をして日英同盟を打診するのですが、当時英国は、超一流の誇り高き国家で、他国と同盟を結んだことのない国です。それが極東の人口四千万人足らずの名もなき百姓国日本との同盟ですから、にべもなく断られても当然です。しかし義和団事件で見せた日本軍の厳正なる軍紀と国際法厳守の姿に、イギリスは注目していました。

実は元老の伊藤博文はロシアに乗り込んで、ロシアを説得することが先決であるとして、日英同盟に反対していました。伊藤に反対されては日英同盟を結ぶわけにはいきません。しかも伊藤は自信をもって単身ロシアの首都ペテルスブルクに乗り込みます。そして日露親交条約の話を持ちかけるのですが、適当にあしらわれたすえ、約束は反故にされます。かくて伊藤もついに日英同盟の締結に賛同し、条約はめでたく成立するのです。